# 羣書類從

五百三下

内閣文庫

内閣文庫
| | | |
|---|---|---|
| 番號 | 和 | 18690 |
| 冊數 | | 666(635) |
| 函號 | 215 | 3 |

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從巻第五百三下

検校保己一集

雑部五十八

七十一番歌合下

第十七番

[illegible]

日本政府図書

浅草文庫

国立公文書館 National Archives of Japan

羣書類従巻第五百三下

雑部五十八

七十一番歌合下

四十七番

撿校保己一集

日本政府圖書

淺草文庫

月かくれ勧学院のすゝめをしたへ入たる人そ称する

とりわきてあてなるあらし東門目のゝす暗き月のあさ

左はこゝの文者の経とおもひてこゝにやうかとと

文中かくし文盛を門おもにうをたるしはいて

ふ勢者の人のまねたる述懐の心をもおもし

# 文者

六韜の末ハ
むかしと武道
あそんは稽古
久しく

詠くせゆ古き詞たくしけれをけよ紀らとり
かわきれ字体連と月ハ寺にいろかましハ人々な
きれ例より左為勝
とくれつきさいふひあれハあんしん落さ衣ハ人々もかね
唐服の二名かつ新りの頼ことも先ハ独とと弐をかほ
太さも古くも花とも思やりつかはるハ思ふの亦亜の
歌の二首詠ハ思もれおひの述懐なる思よ紀
持たるへし

四十八番

鼓うちはやしけるもいつくより月すみけるにや侍らん
くもる夜の月ぞつゝむ小倉山をみるかたかたの秋はさもありなんと
右の歌かつはらみたるにや右ハ當世曲舞小月之
つくさし小倉山の名かくれもなくさりけりと云梅高臣
と思ふまをたつぬや道すまかてそれしともかれハみな播
巨賀の人もむかしハ非ものをたまひけるにむかしもあるか
車ぼく神行まし御ひ女かはな手へし人のかさや
右眉の男舞を青の上頸おさたゝ小腰の白河ハす
左は内右の袖をからさしとつひそとゆうさやといひけら

弓取

弓ハ天下あり
弓ハ義よ
よりて
なりし

めでたくは彼光源氏の顔かと思ひつる花宴にしく侍るとてれの
名くと顔りしてかゝるとハ毎つやあさられんおもて一藤や



白拍子

ふくるよは
ひくかハ
山田の井に
のふりる

曲舞々

月にはつきさ
くらの山の
名ハ
かくれもなし
なり

四十九番

月みつゝうたふこきりこの声きこえ竹の夜すからすみすます声

むしやう人はけさ花瓢箪のうちたゝきめくる月みよかな

左右歌ともに念仏者の事にや

やかましき僧之ありさまたにこゆるの男こそやさしけれ

らしゝやうさつのそ時まてそこもとしてとにかく

さいさかひをみるやうれの声いとゆかしき

の祖はゝ空也といひはしめしものなり

はまてゝ発起興行ありし事なり

放下

まつてなの

ゆふひや

ゆるみしん
えてらんぐ

鉄拐

五十番

四五人ちりむくろれ遠まんし此ちく在月の細か集るる
秋の寒山有その白雲の居あり後月とて孤ゝあ
左に首尾いひかなへり古へより事何のこらふきたて長
夜月ニ仰とつるまはおかし末よくくぐゆきて可捨
くなへてもけふそ忘れまく人まで孫のおかむひろくれ女すること
恋まち行てむくひやすると忘れ冠者うつりけるる人ことふとや
きさらきん我道のまうくとうりて忘れぬ残にせざる
こころのきやけし仍るか

ちんふく

あら海さや
とんやうしひろ
さゝらや申ん
とう

猿がく

## 五十一番

繍の書落やされ紙にそゝくすゝけ白く染める月哉

花おりて几帳にみえける月影のさやかに成にそ更ゆくなる

左勝のうへれ為種よほ縫まてはやされる月

いとめて毎し 右ハ文組にやわりてこうハ組と歌ハ雨ふ

案さくせと悔て目とめくるこんるのをし紙物するし

待ち我ちきりを重しをと宵又待とぬすのいてとを恨めし

恋しおもて折しく我縫ははそや我と恋しきされ人の心なうる

を誰とぬをおもいてしのふるを涌宜し 古き庵なる

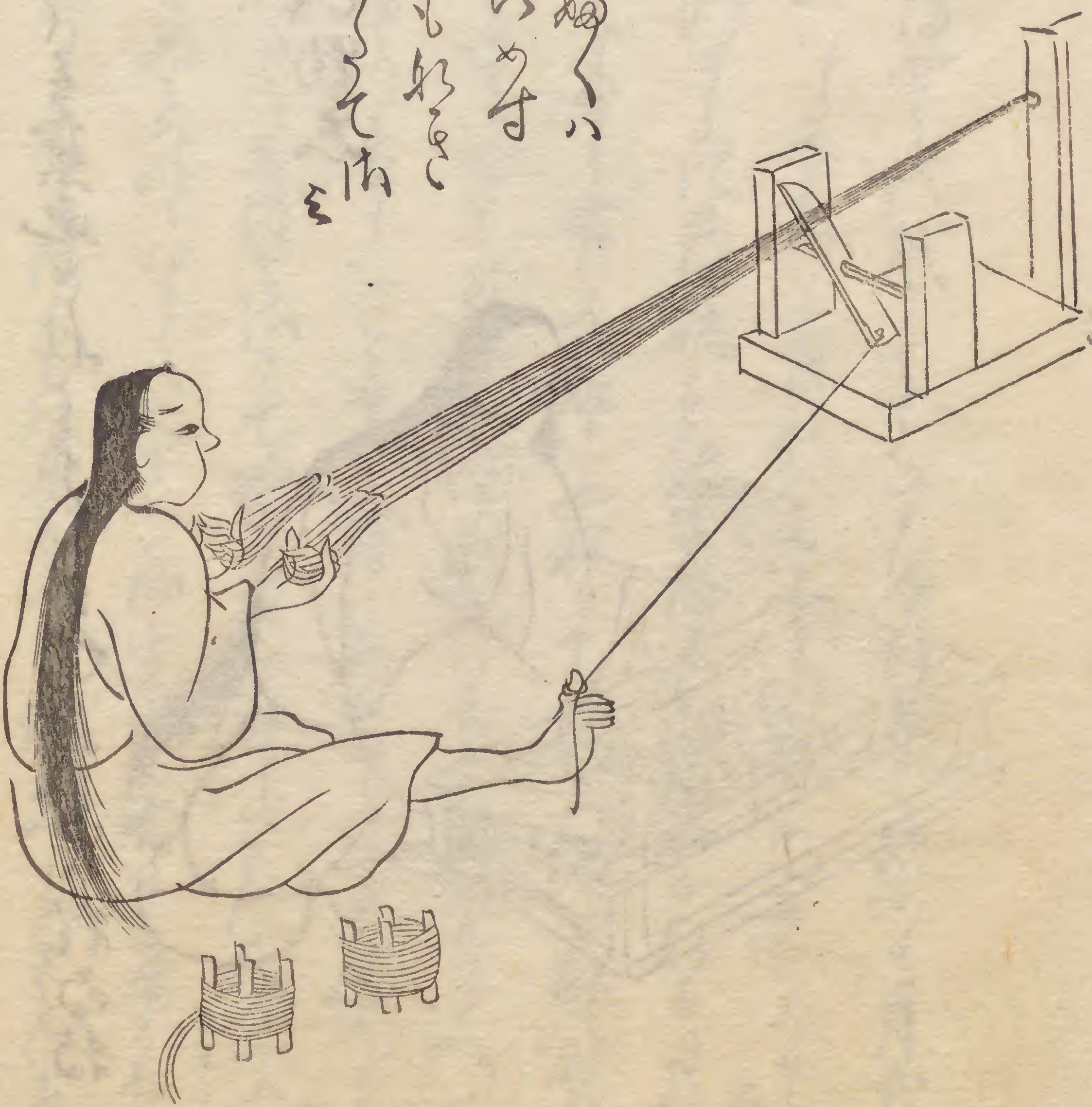
へりし恋し 本とは人の其本なり 詞中へしるとまか

五十六番

ゆふけき月には全て侍るの程ありめり人の秋楓歟
たゝう紙みつ北打ちて切くて北急一とれの秋のよ北月
ともれさせ侍てれし する猫
右ひすり北程田ふさし侍見むと北つきたうり人のみ
是いめやこさ後ふ侍るたゝい時ともや紫しく北まさは
まさ右ことれ致俗乃うちにこもみえ北よところさ
とし ともね

組し

まく糸くハ
あの法め子
人もれさ
うらそ侍
る

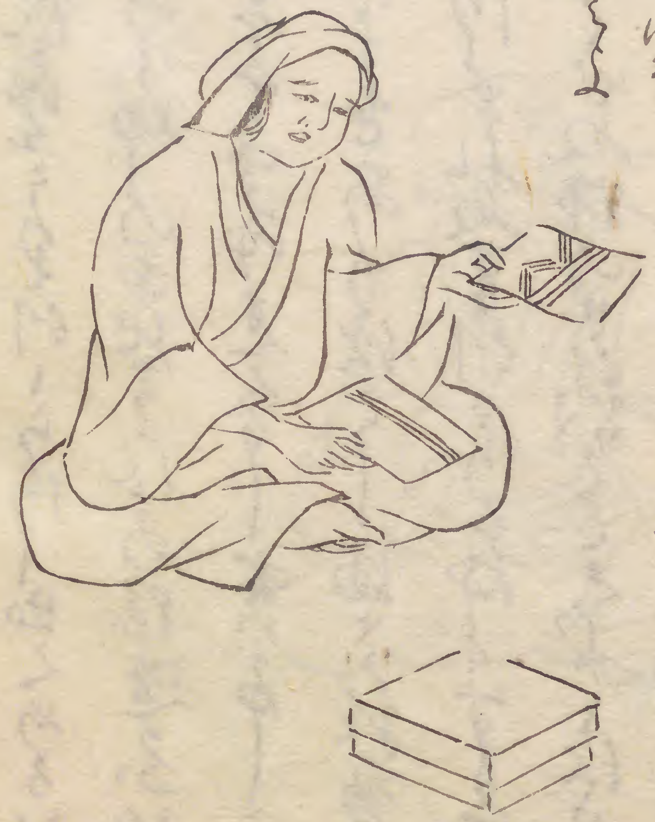


表具し

梅は花の香
すゝめるは
やまぶき

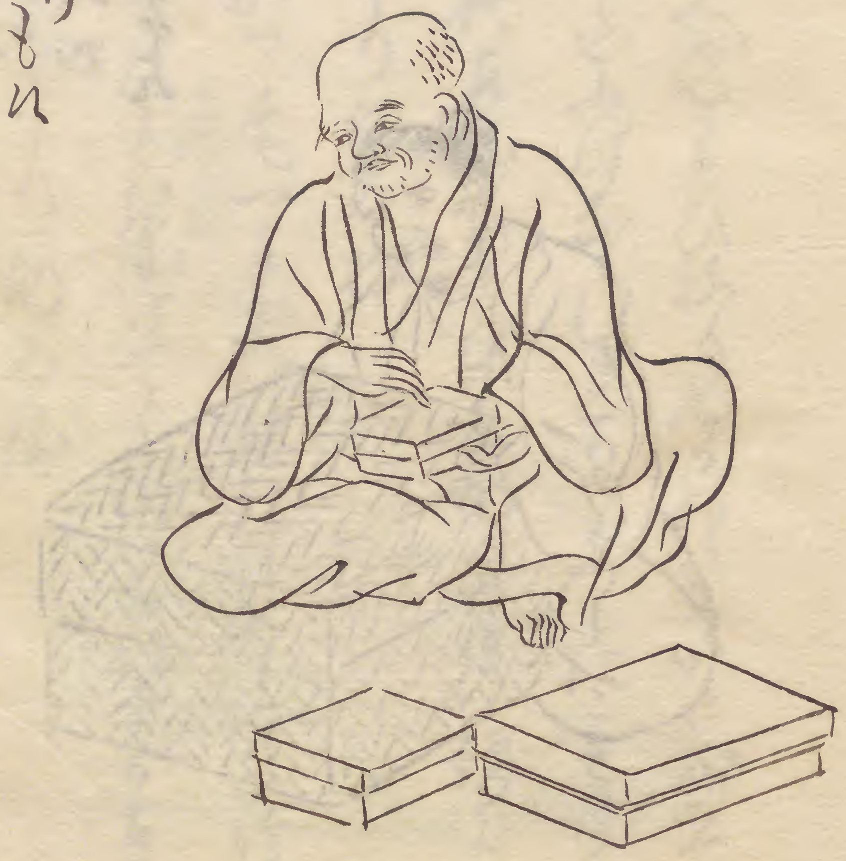
畳紙うり

たゝうかみと
めにたつ色も
よく
いそあるく
ゆそ
いさよ



菊義造

案はらも れ うる秋始人





万年三郎

罪九分でん風にゆらるゝ里川くらに出しぬる新竹月影

月見けりは一番つる姫のお紀かにの猩造み竹やらこ哉

衣風晴れて竹中見へるしなれば申しよるこ竹

やくこにによもあり須こし梅さえ面くや

我恋はせうし行きれ奴書川くらに底にけまてせ孫しよき　寺紀

逢坐非れさ面くせぬ稀のせ孫かくこともてにふ人のとね　うる子

まるおつらにせねとろ人物待るや後ん未る所あるすけ

古郷とはふ網こいふ名れと稀のせねらはこ郷しれと

縁のと米にやさねのて関さるしあん所と出る大橋

五十四番

おかしとて我さへめてしひ袴りぬるはしとあかき繊生の月

紅や花からふ枕うちかけてむかしなからにそ月もそふる

左右共無左右勝へき哉左の歌ハ月の歌よろしきな

といへ右をり物の哉

のちろも更よりて一手只れ我れ身には法のまされ よし

人をうき我うき捨と申やそて摘つ手れ侍る古ときひ郎

右はたくこたより物の勝

皮籠造

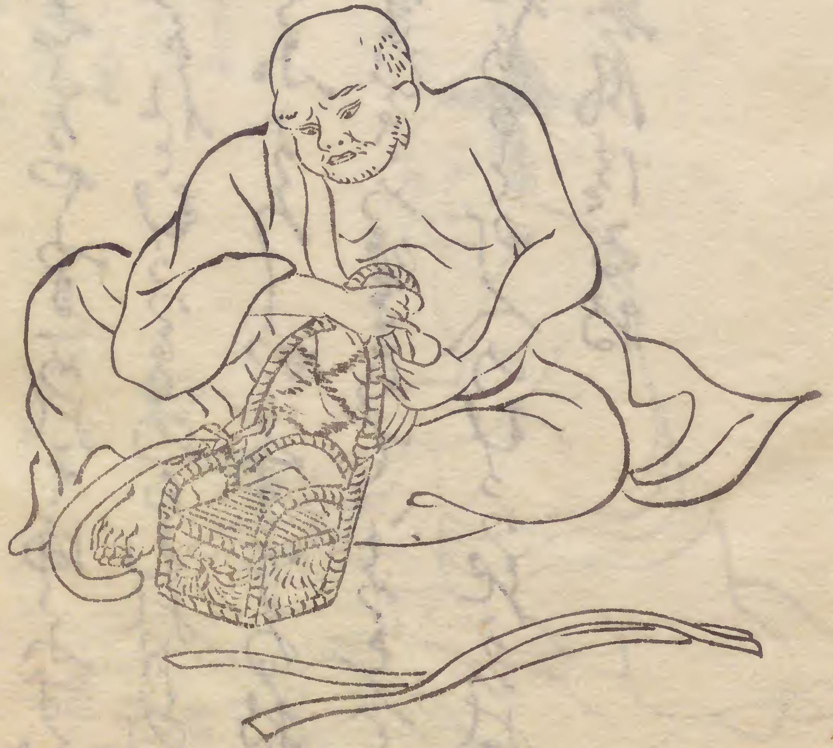
大わかくこい人のあつらへ物もそれ

矢細工

これハちくの
こそあるへく
らまでん

籐細工

さかつこの
なくて柳
為ひらふ
はする



蓑目くり

一尺よあまる
柄をさゝめハ
くまにくくて見えか
ゆのね

五十五番

くらき龍かくこゝろさしてさるや出しめ兆を海にふすむ日紀の八幡

秋深き星ハくもれともつきの色も九月の夜や新日

左右ともにふようにかすすむる持

秋思ハいのちもかきりひさしや涼しくあてにいとゝもみとぬれて勝

行てもさ廉やあるを町人のむかしの紀の人なすそのさ

左右相無風情なる持

むかはき造

あかま此
むかはきや
ゑろも
よし

五十六番

おもひそて金をもかねいれんとひ春とひて是とゆる秋霧月
三川のし村草のむ亟のてみゆる武露のやれる月の光と

左の月と影て金をかね八清んとひのはひたる
らんとうけて御ゆつんとひとへ金作の具足よや

右もみせ物よるみかう入みてまて強て中さハ左下勝や

一様にあふ影にかねのおとりり費目ともれく入をみる秋
あちきなやみ山のとよろかねのみつゝ入不思ひつゝある

左歌のめてみ也右水のかくと二よりひとりて是なり
このはおりひ入て御身もたる里作の物

金ほり

[illegible]

ほうちやうし

五十七番

大鯉のさしをとこ手ありかけて行賀したる左の歌月

をも添へてあはれなれどもくみてもいとめ目とみる斟

右もことに吹毛此鱗を待まて奇なるに

事なれんよりて為勝

こひなる手包丁刀さへ残されたるやうにこそ称もあれ

いふを安き物よむる鏡鋲の思ひつれは人の

書文の庖丁にて魚をもるをいふへくもよせもとぬへき歟

六首みつ鯉とよめる歌ともあきらかなりたりせもあて

鷭の饗膳のわさもんは歌おし猶可勝

五十八番

一節は義おなしとこそみる縫はぎてつかさる麻ぬのゝ月の衣さへ

雲海さは町ひとへはのすゝきを作てさつてぬ月は袖笠

左右ともにふさは事とおもひよせ給へし

されどもそて人にしたがふ布織は我てつくりは忘るゝもするに

思ひあまる涙をいつはりに清しょうぢき直垂はきて經や

左我手にくりは忘よく布にかへしあく投

右の哥をもてしつませらく歳に極はるへ

右勝

白布売

しろぬのの
めせあう
をこはりも
しやくも
よくはれそ

真綿うり

五十九番

絲よりめの絲よするて細麻布をのよるかとみゆまでとよめる 月の歌

一村も曇るとみゆるめりし絲よりし色ある月かなやけき

右めかし綿ハ白はなて白く帯ぬ月清ともや侍らめ

とかき絲の縁なひくすらおもり左為勝

桜麻の思ひ契を乎けつへしてくれのうへとかゝるひきもえん

秋恋の心一川よその綿はえしら浪へまさ侍あかれ

申なかりひきさハよ紀帯とつ色り右又一首よ

絲とかくふけすてかこしよきも持るへし

苧賣

ちる花をよ又
なを毎こそより
うつく
いつれとも
めしえん

六十番

夕暮にひすらへてまとあし　かぶら汝の月の桂の町しまはる

月くらめふらもてこそ汝のうけ身にも我は菓の愛さるをとなし

左梅の秋のまにわれら汝のさと耳かしいの海まはる

たのうくるのる月の秋に急はまか悲へられてや行く

笑ひ右はさうりと如し影もに海まはるさるをや

待まてと左歌ほ手けてと度如し　右の勝

銭高の母のひかを世は岸紀物の形よりやあそとひやまそより

菓の佐のうそや意しとて汝のるの銭た衣もやしゃうし

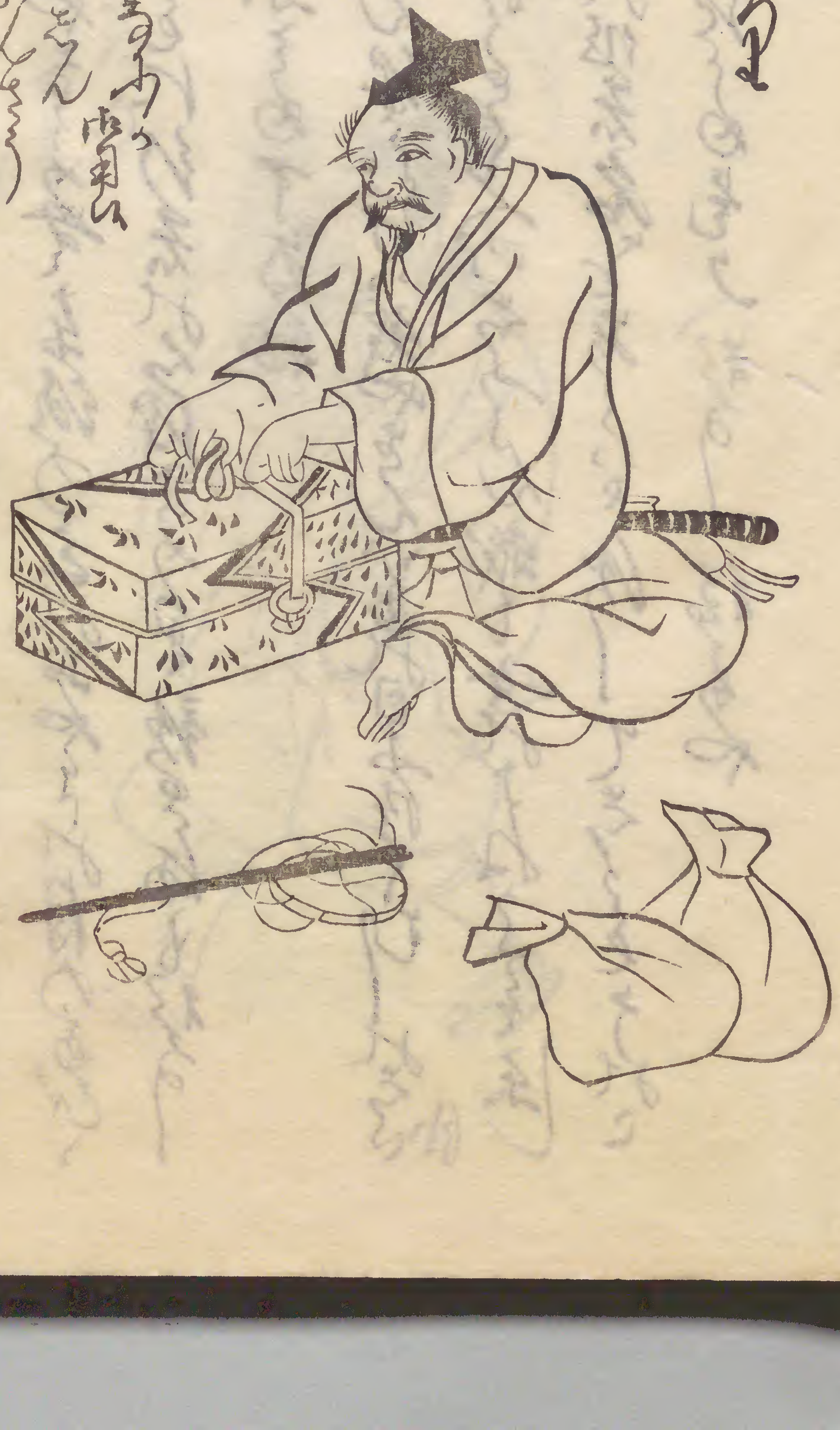
此番の左の囲う乃菓物も菓も兼合て為持

薫物うり

恨ぶ此ゆうりとも
えりとうもくれは
るの名ある
たぬりかろ
おりしろき

薬うり

沈香木香丁子甘草は
りんきん
かんきう
ちやわうしんれ
ちんもん



山伏

是ハ出羽の
羽黒山の客
僧
あてハ三代松
山を年籠中ん

六十一番

あかまつの心すむへき使の那时しも杖の月の岸入
出かけり杉やまのやまゝ東路の三代松やされ月のめくり
大木こそれ羽黒の三代松よりめて頭も松の
わとふさを山伏
先達の山伏ことしけハ我やきん小松目出たし松の
いらたかくけさ衣のほうさん錫も女九ゝねとそ床
きく杖の後名をあらはし深しても云ふもの也
山伏の是も只松の一枝年や

地しや

あ〜おんかまへ
二ふみしるし
はらんせよ

六十二番

さいもんやうき世の原の秋の月とうてかゝる雲拂ひませ

祢宜や神子のたつる声までに月明らか里かくらうた

左歌申口祢宜といふ詞をやすめて月の神とよめる興

あり右の神子と神楽歌て殊更に哥ゆへ心言葉拙へし

歌合にはあまた事もなし仍左可勝

祭文といふことを人の好やうにもいはれぬ也やさしかるへきを哥にはいかゝ也申さん

かゝる事にも猶かの事ひとつもなしと思ひ人とも思ひ

右哥よしはかなくもたゞまつてゝ之哉こそやさしく

なるは金玉と想ひめでたき歌に勝

祢き

たう海はらよ
祢ぎゞまゐ里
よしして

祢さくあらよゝ
神のをこひ風よ

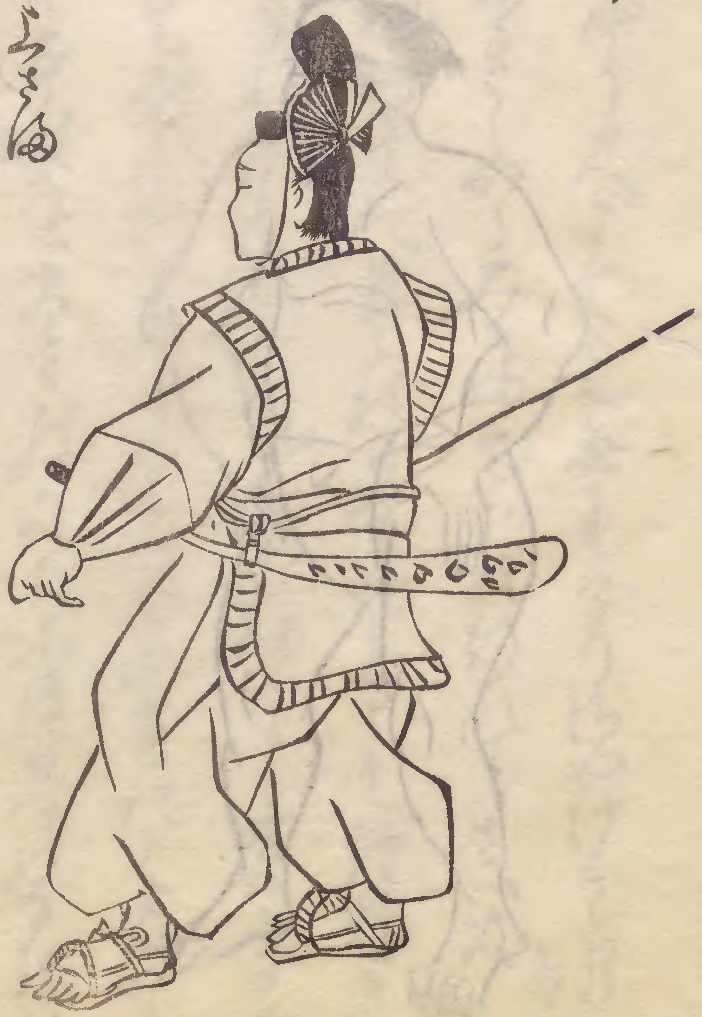
かんなき

六十二番

菖蒲の海く節とられあかる起ひ馬くらべすや月にわたりん
新涼河をとゝのへけまへば辻守なと目くとし頭不あらして稀なり
左右ともに紅洞くとあひさるけつくみするに云れ
ハ勝負ありけるとしよ絵物語あ趣し
おいする代そく乱れてたる我かやなつたかぬ意とする所
力の意ハさけん氏の情を賀やかしてにふるも遂人ぬるよ
き出楽し頭く絶む形右ハ此の民ならずあらか
人のありさんよくとるまよまつりける勝

# 競馬組

むかしは上さ海
ままでて若き
まゐし
幸のそれこの
民人のたよ
かうりて



道のかり出よ
相撲の名り
めされとや

相撲取

六十四番

眠らねハこゝろやすくて夢もなしかりねやはけきさわくと伴にて
観念の月あきらかなるみる時てハ我なしともさハ大しうる

右ハ茂禄の中にて月を眺らめ能念とて仏釈もあるさ
申ぬへくれとも月と観念を悔し右の寺の名
ふかきそて我家とあしらひと強也きれと左かくや
恋しさおもひ本性を書をねかハへらふ隆昇北す紀ハ右をこうハ
中にて我子淡ふかそ邪淫戒を守つやいかや恋の忘し
左ハ恋すまでてとも本性とかけこさたうま右の方
を我とやかうんの心深し難のすむ所ハゆうし

め源ニたよりて釈尊ニ勝

# 禅宗

二
文字はたよ
をしへて空ふ
宗旨たつへき
まことなれ
なまし口をとひ
かくしてこそひ
こゝろ道

一
宗旨けり別伝と
かいふ也
五とや祖師とハ
仏なるそ

# 律家

六十五番

華厳はむらしね露にやどかなり見ても上品上生の月

我法の月そてらさん末法の世のよ闇をてらめつさともあらハ

左右とも報宗旨と何もとなり法の衛勝と繪 (河達)

是之うう次

往生路さつと是を頼る先人へとくらん音せいし来迎も哉

一目みてつとらねせさりし物はしかはれ十夜制あもしかくやとそと上ふ

是又とあとふ親音勢至之成待もし十夜をつ安て思

居さり且に哉なきんあくす尊深氏の物語にても法を

たうく頼しきにある婦とぬあつりきをたとも九二ア勝

# 念佛宗

只頼往生もたゝく
往生も只つよひ南無と
ふきのつまに極楽に生
ねんのうちつひにあらん
南無阿弥陀仏く

末法まんねんよ経
とちめ(?)のみは(?)は法
あとやハ我かな
祖師日蓮上人の
法はひろまれん
こそ

法花宗

六十六番

秋霧ハ月すむ山のからしもを面れ曲てひくきらんそこそ
法花宗のふかうしかんきかやさハ今てし浄も法を知て
けふやはや曉の秘曲を奥ハ得りて任くかやさうハ経なる
浄いひ知るを法るかや左露ハ浄物よ打越と極形式れ
ふ給ハ待まて山の打越出なやは毛と面りて下お給
戒儀て神よ手向のつくね等是後山とみて物ふきん
別浄よみくるうたふ旨しあれさ所の所を作神の森ハ
山と職物まて念後の手向よ紅葉あれよあひ神的
細文れ法示越へしよ又神の傍陵の景群ハとも法の

早歌の稽古耳くと驚かし侍りけるとすへし

来歌し

よみうらひ

かとえすの
なをは
あそしこの

六十七番

いはくさや二称名寺のえ見つしきに京白川にすめる月影

御教中や後会につとめぬるひさかたのみなふかしとも法花の月

左右ともに秘事ととりてみな流をこゝろふかし

されど左の月をひろくとめり右は月を読入

まくれたし次つしは左勝ち申すや

本性とけくさんよしそ思ひしよつたにさやらけれ男ならぬは

男よりも子のつくにとそうや称とも流むるは我らと落しみなくぞ

まだ左も法に見ぬ恋へきつ孔へのつはとも題よ

よりてもなめ作くさもとを侍るへしみな拿さへ人なり



結ふ袈あしふきの里けん菩提にあらをやすかぬ

ひくに

四
されはいよとひつきを
亜らてんそく
いさし

二
佛菩子ハ左さもさもそれも
雨左元もきかん
らへとハへすハ
かめつハ御らハ
法とも紗法く
れすしすれく
さかん海もハ
れふし法ととも
てハよもれり
な

一ゆふくれはをかつらきん八まりくせ
鐘の音きこえておとろかさんとる
とくかやつりけそ

三教ともさらん念しかすはきにてこそく

行う

六十八番

三井寺禅衆まてたまふとよみや我山僧の月にはさるされ
さん論の法法の空を明らかに南にあらぬ法相の月
右ハ四方ある山中に我山ハ及かたしといひ左ハ南都の
月とあらめる見せまよ是非を申かたし可為持
ひるそあかりの寺禅衆のかたさとはいちこともなる人さえさ
立てさふとこれへさきと思ふまた我かくこそ光あらそとうるそ
きこつちこ二山をとの中をよく思ひをたり
右寺ハ法ハ浄業に心るゆへなやされと宮こ
にてこそ待まつらく八今より京にて侍みや花の勝

山法師

ワつゝ門
そこの
月よどをよく
魚さ
和しを
杉わかね

ちはこし北目
よわきぞ見ゆあれ
さそそ春日なる
みかさの山よく
よとほしめ

大よ夜法師

六十九番

我法のむしろにハ人をもて清浄にすゝめ我月をも
置ずして人に易く参ん月をさして物我ゆるすの心に逆ふる
左右をも不浄とも我門に入これハ汚れをとも見
中ちかし老ハ定て其心浄をまへてさしむ清滝など
流るゝ身ちかし老ハ法ねん論をもちかしあらハ
侍るにやそれ理定かにしるやおすゝめて為わ
思ふ人あハ道一茶すら我城あらハ橘をのすゝむ時もあらぬ
侍人のうち我やしとおもふに少年の昔を海あらハあらぬ
老哥熟せ茶花もとを我侍ることをも学かし古人も

侍してんちりする少年とせきる侍るにゑあへしゆかしる儔

義叢宗

法なりて地法
茶のこゝろ
まなし

小斗みたる
よしめぐる間
ひかりなくして

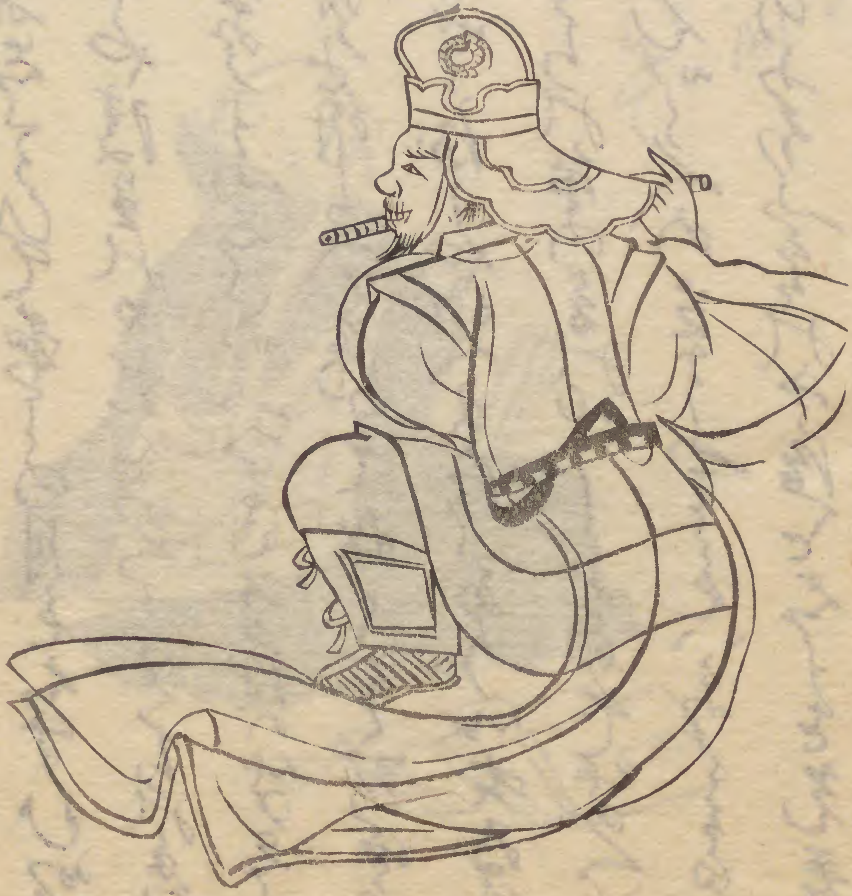
俊恵法師

七十番

面白や竹のこかくへふせりて夜もすがらの月をながむる世の中
入りし此月に湯ならや陸も見れ日影とかつまくら見ばよかし
夜たかし笑みおよふこもしかへてさに見れ物のゆえこれ
ときも古今日に月をよらへ之化そ招くことかの字治の
ふる見と思ふよせばかまやゆくるにくありも衣為待
顔をそし河ならとらん筆の落れゆしとめて代のへ行
神かくは激やさこんかくへのさまらふことしい恥ときの
さきときふかのかわならん字治とときを見表の
そて打振し事にさすくへてかりひのをくといふ

里ゝ毛にや侍らく笙ゆゑ紀物く串待絶し

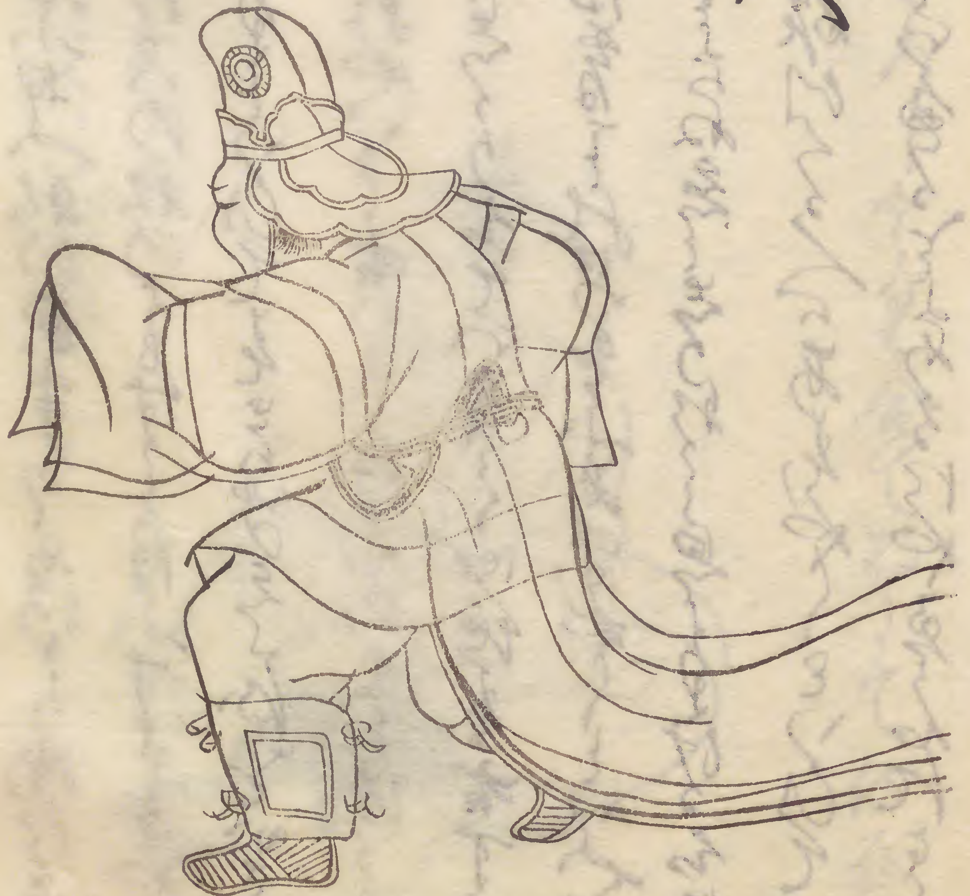
楽人







舞人



酢造

かゝるへし やまひ合ておもふて 侍るへし

あまくし さかつくり

七十一番

さきの歌は宗祇の秋の霧まあつめ給ひ泥たる月に新敷
らる歌んの明ハの秋のよもすから月にすさまじや我んては
左あるまたいひてもさへさふとかき添てす
とよみ歌やいつ右のうけんの心も法ゝて分と
ら深てとゝうらて心は我らく心地も右可勝
ハ汁よそゝ紺屋ても口つもふあすやしとふくとた風安
我みよう夜なとよ宿ね念てをり秋の色す月ける紅梅さよ
志歌は破川くる人ハあまれやといひて程ことに
まだ外の色るとよめるはやさしれとこも右ハ

右職人盡歌合繪土佐刑部大輔光信朝臣書東坊城權大納言和長卿筆也摹本在住吉内記家秘而不出閫外故使門人畫贈之其歌与詞以新井筑後守君美朝臣所傳之本寫之淨書者屋代弘賢也

日本政府圖書

羣書類従巻第五百三下

三十九了

修理 昭和28年12月 内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan